

ベルサイユ条約の調印

東京学芸大学 教授 川手 圭一

1919年1月18日、第一次世界大戦のパリ講和会議が開催された。この日は、1871年にドイツ帝国の創建がドイツ皇帝ウィルヘルム1世によって宣言された日であり、その選択は、明らかに戦勝国側による敗戦国ドイツへの意趣返しであった。事実、会議には32か国の代表が集まったものの、ドイツなど敗戦国は講和案がまとまるまで出席できなかった。加えて、革命後のロシアも会議には招かれていない。会議をリードしたのは米英仏伊日の5か国の代表からなる十人委員会、日本からは西園寺公望^{きんもち のおあき}、牧野伸顕らが代表として参加した。最終的に会議を主導したのは、ウィルソン米大統領、クレマンソー仏首相、ロイド=ジョージ英首相の三頭会議であった。

思惑を映し出す鏡の間

この絵『ベルサイユ宮殿鏡の間における平和条約の調印：1919年6月28日』を描いたウィリアム=オーペンは、アイルランド生まれのイギリス人画家であり、多くの肖像画を描いたことで知られる。大戦中は、宣伝省の戦時芸術家として西部戦線に派遣され、多くの戦場の場面を描き、戦後、パリ講和会議の公式肖像画家に任命されていた。

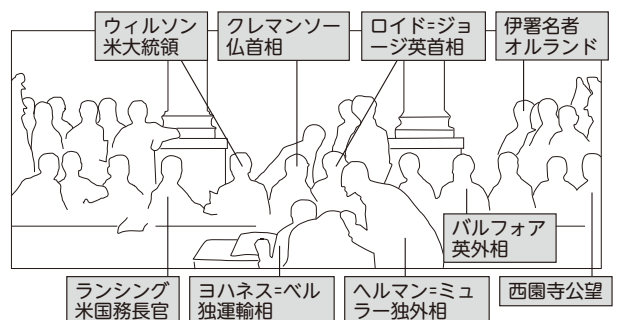
条約調印の場面を描くこの絵に注目してみよう。長いテーブルの向こう側に陣取っているのが、戦勝国側の政治家、外交官たちである。座っている者たちのうちで、左から数えて5人目、両手に紙を持つ面長の人物がウィルソン米大統領である。彼は、前年1月に14か条の平和原則を掲げ、国際連盟設立を訴えるなど戦後世界の平和を希求した。その右の白い髭を蓄え禿げ上がった顔はクレマンソー仏首相。彼はフランスの安全確保のため、アルザス・ローヌ、ザール地方、ラインラントのドイツからの割譲や多額の賠償金などを求め、ドイツに対して最も厳しい態度をとった。その右に座るのがロイド=ジョージ英首相である。彼は、イギリスの利益の確保のため、ウィルソンとクレマンソーの間で妥協的姿勢をとり、ドイツに対するあまりに過酷な要求には消極的であった。他にウィルソンの左隣りにランシング米國務長官、ロイド=ジョージの右2人目にこの時は英外務大臣を務めていたバルフォアの姿もある。

他方、画面下部中央でこちらに背を向けて戦勝国の面々と向き合っているのが敗戦国ドイツの代表である。小さなむき出しのテーブルの前に座って調印書に見入っているのがヨハネス=ベル、その横から腰をかがめ椅子に手をかけてのぞき込んでいるのがヘルマン=ミュラー。共にバウアー内閣の閣僚である。1918年の帝政崩壊後、ドイツでは共和国が成立し、社会民主党、中央党、民主党のワイマール連合がこれを支えた。バウアー、ミュラーは社会民主党に、ベルは中央党に属した。しかし条約の諾否をめぐる国論は二分し、民主党も政権を離れる中で、6月22日に国民議会が受諾を決議してようやく調印の運びとなった。

しかし絵の全体の構図からみれば、主役はフランス国王ルイ14世のつくらせた「鏡の間」の建築であり、政治家たちは脇役の座に甘んじているようにみえる。上部中央の「*Le Roi gouverne par lui-même* (王が自ら統治する)」の文字は、これが紛糾した会議を上から断じているかの如くである。また、正面の反射する鏡の奥に映る3人の黒い影は何を意味するのか。一人はドイツ代表ミュラーとしても、他の二つの影からは、会議場の喧騒と条約によって作り出される世界から冷ややかに距離をとった演出が垣間みられる。

ベルサイユ条約が導いたもの

ベルサイユ条約は、初めての国際的な平和機関である国際連盟を誕生させた。一方、条約調印から1か月半後の8月11日、ドイツではワイマール憲法が公布された。これは当時最も民主的な憲法といわれながら、国内では帝政時代からの保守的な政治・社会勢力が力を保持し続けた。その中で、ドイツの敗戦は国内の裏切り者のせいだとする「^{あいくち}七首伝説」が右翼の間に広まった。ベルサイユ条約調印に関わった政治家も右翼のテロの犠牲となった。ヒトラー率いるナチスもまた、反ベルサイユ、反ワイマール共和国を掲げて勢力を拡大していく。だが、脆弱な基盤の国際連盟に、こうしたファシズム勢力の台頭と侵略行為をくい止める力はなかった。





ロンドン・帝国戦争博物館所蔵，写真提供：ユニフォトプレス